Journal of The Human Development Research, Minamikyushu University 2021 ,Vol.11, 3-15

研究ノート

フランス・ブルターニュ地域圏におけるESD・環境教育（３）：小学校の課外活動NAPを担うアニマトゥール

遠　藤　　晃

Environmental Education in Brittany, France (III)：Efforts of the animatulle to improve the quality of NAP（Nouvelles activités périscolaires）of extracurricular activities in elementary school

Akira Endo
Faculty of Human Development, Minami Kyusyu University, Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan

Key words: ESD, Bretagne, France, NAP, animatulle.

はじめに

平成29年、30年に改訂された学習指導要領は周知徹底と移行の期間を経て、幼稚園では2018年度より、小学校では2020年度より全面実施され、中学校でも2021年度、高等学校では2022年度より全面実施となる。今回の改定では外国語教育や道徳教育、プログラミングなど新たに組み入れられた内容もあるが、大きなポイントとしては「主体的・対話的で深い学び」や「社会に開かれた教育課程」、「カリキュラム・マネジメント」など、学び方と教え方に関する部分といえる。この改訂により学び方については課題解決型で探究的学びが一層重視されることとなり、教える側にはその実現のための教育課程やカリキュラム、指導法の見直しと充実が求めれることとなった。

探究的学びは、例えば高校では、古典探究、日本史探究、世界史探究、地理探究など科目の再編や理数探究基礎、理数探究の新設、総合的な学習の時間から総合的な探究の時間への名称変更など、探究ベースの学びに移行させる文科省の強い意志が示されている。また、幼稚園から高校までの初等中等教育を貫く学びの実現のために、教科等横断的学習、短いスパンの中での習得・活用・探究のバランス、理数教育における課題解決学習の充実など、探究的学びを推進するためのカリキュラムマネジメントを求めている。なかでも「総合的な学習（探究）の時間」（以下、総合的学習）については、探究的な学びそのものであるだけでなく小学校学習指導要領第１章「総則」で「総合的な学習の時間において教科等の枠を超えた横断的･総合的な学習が行われるようにすることなど，教科等間のつながりを意識して教育課程を編成することが重要である」と示されていることから、カリキュラム・マネジメント及び社会に開かれた教育課程の実現においても中心的な役割を担うことが期待されていると考えられる。このように総合的な学習の時間の視点からみると、「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメント」の3つの要素は独立に存在しているわけでなく、3者間には相互作用がみられることがわかる。例えば、総合的学習ではこれまでも専門家や実践者など外部人材の活用はほとんどの学校で取り組まれてきた。しかし、平成25年度以降の全国学力・学習状況調査により、課題設定から調査、発表までの探究的な総合的学習を受けたと強く思う小学生の割合は徐々に増加してきていたものの30%弱で推移し、最新の結果では25.2%へと再び減少に転じている（国立教育政策研究所、2019）ことから、外部人材による授業の教育課程への位置付けが明確でなく、単なる体験に留まり、主体的・対話的で深い学びに基づく学力向上に繋がっていないことは容易に予想できる。

著者はこれまで、探究的学びの観点から、小学校における総合的学習の実践研究に現場教員とともに取り組み、外部講師としての関わり方についても検討を加えてきた（遠藤、2017a）。また、今回改訂された学習指導要領改訂のモデルとなった学習プログラムとしてのESD（持続可能な開発のための教育）について、フランス･ブルターニュ

地域圏における現地調査から、学校とアニマシオンを担当する外部団体（図書館や小学校、アソシエーション）がコミュニケーションをとりながら、小学校の教育課程に位置づくように授業や課外活動の時間に取り組んでいることを断片的にではあるものの明らかにしてきた（遠藤、2017b、2019、2020)。これらの研究は、日本の学校教育における学習指導要領の具現化のためのESD的な学びの実現の手法を確立することを大きな目的とし、本研究では学校と外部との連携に焦点をあて、フランスの教育現場でESDを担う各種組織・機関の現場で実践している方たちについて、ESDの捉え方、ESDの手法、学校教育との連携などについて情報を収集し､明らかにすることとした。

調査地および調査方法

調査は，2014年10月初旬にフランス北西部のブルターニュ地域圏を訪問（図1）し，モルビアン県プロエルメル小郡のコミューンMauron（モーロン）にあるMédiathèque（メディアテック：メディアセンター・聴覚ライブラリー）と隣接するコミューンConcoret（コンコレ）の 公共施設Espace Eon de L'etoile（エスパス・エオン・ド・レトワール)、モルビアン県西部の小さなコミューン Kernascleden（ケルナスクレダン）の博物館 Maison de la Chauve-souris（メゾン・ド・ショブスリー：コウモリ博物館）とその西側Le Faouët（ル・ファウエ）のEcole primaire publique（小学校）に於いて，児童や生徒を対象とした自然をテーマとする環境教育プログラムに参考観察して内容や様子を記録するとともに、指導者にESD環境教育の取り組みと姿勢、子ども向けや学校との連携などについてインタビュー調査を行った 。インタビューはすべて IC レコーダーで記録して文字に起こしたのち、その内容から学校教育におけるESD環境教育を推進する際の､「プログラムの捉え方、進め方、外部機関（地域の行政、図書館、博物館）の関わり方」について重要な要素を抽出し明らかにした。研究資料という観点から、インタビュー内容をできる限り忠実に再現し、修正は、言い回しや語順など最小限に留めた。なお，各団体とのコーディネート及び移動，仏語通訳はシャルバーグ八千代氏に依頼した.

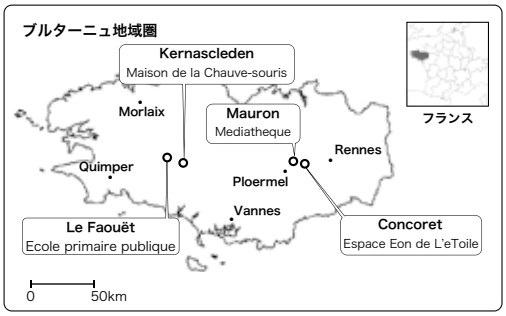

図１：調査地（フランス・ブルターニュ地域圏）

尚、フランスの小学校（エトール・プリメール）は5年制で、6歳のCP（準備科）から、CE1（基礎1年)、CE2（基礎2年)、CM1（中級1年)、CM2（中級2年）と進級していく。

結果

1　Médiathèque de Mauron（モーロンのメディアテック）

2　Rue de la Libération 56430 Mauron

Mauronはフランス・ブルターニュ地域圏のモルビアン県北東端に位置し（図1)、面積67㎢、人口3000人程度の小さなコミューンである。近隣にアーサー王伝説の地として有名なブロセリアンドの森（La forêt de Brocéliande）があり、この森では多様な自然と伝説をモチーフとした様々な環境教育プログラムを体験することができることから、自然を活用した環境教育の実践をみるために最適な地域と判断し、調査地に選定した。

2014年10月6日にMédiathèque de Mauron（図2）を訪問し､図書館司書で責任者でもあるレティシア・サリック氏（Mme. Laetitia Salic）が隣接するコミューンConcoretで提供する児童対象のアクティビティに同行し、終了後にモーロンのメディアテックに戻りインタビュー調査を１時間ほどおこなった。活動内容とインタビューの概要は下記のとおりである。

図２：Médiathèque de Mauron

図４：私立のSaint Laurent小学校

１）コンコレの公共施設エスパス・エオン・ド・レトワール（Espace Eon de L’etoile）でのアクティビティ

Concoret（コンコレ）はモーロンの東側に位置する人口は700人程度の非常に小さなコミューンである（図1）。このコミューンには、公立のTaureau Bleu小学校（Ecole primaire publique le Taureau Bleu、図3）と私立のSaint Laurent小学校（Ecole Primaire Privée Saint Laurent、図4）の2校があり、今回のアクティビティはこの二つの小学校に通うCE1クラスの6～8歳の児童を対象としたもので、両校に隣接する公共施設エオン･ド･レトワール（図5）で、オオカミをテーマとする一時間の活動をSalic氏とサポートの男性の二人で担当した。同じ時間に屋外では、スポーツを専門とするアニマトゥールと「ブロセリアンドの森」というアソシエーションのスタッフ２名の指導で、CE2クラスの児童たちがスポーツと自然に関するアニマシオンを行った。

この課外活動は一週間に火曜日と木曜日、金曜日の午後に3回あり、コンコレでは今学期（9月から10月にかけて、11月1日のトゥッサン”万霊節”の休みまでの七週間）、CE1クラスが「オオカミ」をテーマとして毎回異なる内容の活動に取り組む。

フランスではTAP（Temps d'activités périscolaires）という教員も関わる課外活動が学校の活動の一環として行われていたが、2014年から地方公共団体や委託を受けた外部のアソシエーションが主体となる課外活動NAP（Nouvelles activités périscolaires）に制度が移行した。TAPからNAPへの移行に伴い、教員が関わらないかたちで課外活動が行われることとなり、Salic氏にとっても今回のアクティビティが新制度への移行後、初めての取り組みであった。

この活動は学校とアソシエーションとが直接契約しているのではなく、市町村がオーガナイズしている。学校の授業ではないけれど、NAPへの

図３：公立のTaureau Bleu小学校

図５：公共施設エオン・ド・レトワール

参加は義務であり前もって欠席届を出さなければ無断で休むことはできない。このようなルールはコンコレ（役場）がオーガナイズしていて、自治体によってその内容は若干異なることがある。

15：30に授業を終えたCE1クラスの子供たち27名がEspace Eon de L'etoileに移動してきて、一時間のアクティビティが始まった。初めに全員の出席を確認したのち、子ども達は二つのグループに分かれ、一つのグループは体育館でSalic氏によるタピや人形を使ったアニマシオンに、もう一つのグループはレクチャールームで本を使ったアニマシオンに参加した。それぞれのアニマシオンは30分ずつで前半と後半でグループを入れ替える。通常は子ども達の世話を担当するヘルパーが付くが、そのヘルパーが今回はイレギュラーな対応で屋外でのアニマシオンを急遽サポートすることになったため、Salic氏のアニマシオンは一人で担当することになった。彼女が先に担当するグループの子供たちに付いて体育館に入ると、床には家や森がアップリケされたタピが敷かれ、その上に手作りの布製の人形が用意されていた。オオカミと小さな女の子の人形で、子ども達に語られるのは赤ずきんの物語のようであった（図6）。

図6：アニマシオンに使うタピと人形

体育館でのSalic氏のアニマシオンでは、人形を使い、簡単なリズムの歌を交えながら物語をイメージ豊かに子供たちに伝えていた。途中で、「何の歌かわかる？」とSalic氏が尋ねると、一人の子どもが「子守唄」と答え、それからみんなで一緒に歌っていた。終了間際には、いつまでも人形で遊んでいる子の名前を呼んで注意を引いて遊びをやめさせたりしながら、子どもを二名指名し、人形の後片付けを手伝ってもらっていた。いつもは、少し意識が外れそうな子に注意を促すヘルパーが良いタイミングで関わってくれるのでアニマシオンに集中できるが、今回は、良いタイミングで注意してくれる人がいなかったので、みんな自由になってしまったとのことだった。このようなイレギュラーな対応もNAPが始まったばかりで試行錯誤しているなかで起こったことであった。

レクチャールームのアニマシオンでは、「オオカミの旅」という本を使って静かに話が始まった。場所や時空を超えて、歴史的な「時」や「場所」を旅しているオオカミの話で、マンモスがいた時代から始まり、有史時代からローマ時代、コロンブスの時代とどんどん時代が下り、ヴェルサイユのルイ14世の時代、フランス革命、最後に月にも行ける現代までを旅するオオカミの話で、アニマトゥールはときおり子ども達に問いかけ、やりとりをしながら話を進めていく。

本を読んだあと子供たちにオオカミのイメージを見せるはずであったが、本の中にドラゴンが出て来ると、それに子供たちが夢中になってしまい話がどこまでも広がってしまった。それで、子ども達に少し質問して話を戻そうとしたが、それに対してきちんと答える子もいたり自分の言いたいことを話してる子もいたりと、年齢にあった進め方をしていた。最後にオオカミに関する質問が書かれた用紙が配られ、子供たちが用紙に答を書き込み、アニマシオンが終了した。この質問票を作った人が翌週の月曜日に、「オオカミ」をテーマとした別のアニマシオンをここで行うということだった。

アニマトゥールはここでオオカミについて子ども達に質問したり教えたりはしない。学校ではないので、質問への答えが正しいかどうかを確認する必要もなく、その時間もない。質問に対して正しい答えが書けるように、どちらの活動でも内容を伝えていた。ちゃんと子ども達は自分で考え、発見していけるので質問票の答は書けるだろうし、もしわからなくても、たぶん訊くはずだと、

子ども達を信頼していた。

コンコレは月曜日と木曜日がアトリエの時間で、15時30分に学校が終わった後16時30分まで課外活動があるので、親はここに迎えに来る。アニマシオンが終わると子供たちは迎えに来た親たちと家へ帰っていく。親が働いていてすぐには迎えに来れないため、アニマシオンからスタッフに引き継がれた子ども達はおやつを食べたりしながら18時までここで過ごす。

普通のコミューンにはスクールバスがあるが、コンコレでは町が契約しているタクシーで子ども達を家に送り届けている。費用は親も一部支払うが、市や町がオーガナイズする場合は市や町が負担する。大部分の子ども達が親の迎えで帰った後、セキュリティのために、残った子達もグループでタクシーに乗って帰る。

2）モーロンのメディアテック（Médiathèque de Mauron）にてインタビュー

メディアテックのホールにはオオカミをテーマとした展示物が並んでいる。ヨーロッパオオカミの迫力ある顔の写真パネルや、オオカミを描いた絵画、オオカミがでてくる歌の楽譜などが、センス良く美しく展示されている（図7）。ヨーロッパでは、オオカミは多くの国で絶滅・激減し、オオカミに出会うことはなくなった。しかしオオカミは文学の中で大きな存在であるので、オオカミをテーマに展示をしている。今日の活動のテーマもオオカミであった。コンコレのアニマシオンを終えてモーロンのメディアテックに戻り、Salic氏にインタビューを行った。

L：この図書館にはオオカミに関する本を10冊所蔵しています（図8）。（本を示しながら）この本は、簡単なもので小さな子達のプレゼンテーション用です。幼稚園の子ども達には簡単すぎるので、ヒントを手掛かりに言葉を埋めていくクロスワードパズルのような、少し難しい本を使います。CE1、CE2（7、8歳）の子ども達はこの本がとても好きですが、CE1の子にはちょっと難しいこともあります。学校でもこのようなタイプの本を使って動詞の活用を勉強することもありますが、ここでは学校とは違って、クイズのような遊びの要素があるものを使います。こういうものはインターネットでも探して、私が工夫して作ったりします。7週間のあいだ、同じ子ども達のグループを相手にするので、同じことをやっていては子ども達は飽きてしまいます。だからそれを飽きさせないように準備するのがすごく大変で、いまはそれが悩みです。1学期の間にテーマがひとつあるわけですが、何段階（何学年）かの子ども達がいて、そのそれぞれにどうアプローチして行くかというのは全部こちらで準備しなければならないので大変なのです。

E：内容を考える時に学校と話をするということもあるのですか？

L：いいえ、私が考え、基本的にこちらから提案

図7：メディアテックの展示

図8：絵本を紹介するLaetitia Salic氏

します。今年の初めにこの「オオカミ」というテーマをすべての学校に投げかけていました。3月頃に学校が決めたテーマは全く違う「世界旅行」だったのですが、たまたま「オオカミの世界旅行」という本があったので、双方のテーマを合わせて、今回はこの本を使うことに決めました。

E：今まではマレトロワのメディアテックのように学校と一緒に一時間を半分ずつアニマシオンをしていたのですよね。これからNAPに変わることで、学校の先生は完全に来なくて、アニマトゥールだけでやることになった時に、学校との連携はどうなるのでしょう？

L：以前は、学校に行ってとか、学校の方からここに来てとか、そして先生も来ましたから、学校や先生とのコンタクトもとりやすかったし、お互いに相談し合うということも必然的に起こっていたわけです。しかし、この9月のNAPにより、今日お見せした一時間のアニマシオンみたいに、先生や学校が関わらないままメディアテックやメリー（役場）が課外授業をオーガナイズするような形になったため、とても大変です。今はもう、カオスの状況なのです。

財政的な面でも、地方の予算は今どんどん削られているのに、このNAPの取り組みは費用も地方で担わなければならないのです。このような経済的負担もありますし、時間についての負担もあります。私は以前は老人ホームなどに行って朗読などしていたのですが、そういう時間が今はありません。それらを全部このNAPの方に使わなくてはならなくなっています。

そして、すべての子ども達に平等にNAPを提供すると国は言っていますが、実際には、レンヌなどの大きな町の子ども達は近くのミュゼ（博物館や美術館）に行くこともできるけれど、モーロンみたいな小さな自治体にはそういう施設は近くにありませんし、大きな町のミュゼに行くとしても、そのための車やバスの予算がありません。財政的にも時間的にも、日常の業務でただでさえ大変なのに、さらにいっそう大変なことになっています。私たちは、もともとアニマトゥールとして仕事をしているわけではないのですが、そういうことまでせざるを得ない、という状況にあるのです。

E：今日、エスパス・エオン・ド・レトワールにいた小さな子どもたちのアニマシオンのテーマも「オオカミ」だったのですか？

L：いえ、違います。コンコレでは、幸運なことに「ブロセリアンドの森」というアソシエーションが施設の近くにあり、その団体がNAPの取り組みに参加しています。小さな子どもたちのアニマシオンは、その「ブロセリアンドの森」が担当するので、「オオカミ」とは違うテーマをしています。一方で、モーロンではアソシエーションの参加がなく、そのプログラムはないので、私のプログラムだけでやっています。このように、コミューンの事情によって状況は違います。

L：このNAPは、この2014年9月から公立学校では必ず取り組まなければならないことになり、従わなければペナルティで罰金を払わなくてはならないくらいの厳しい縛りがあります。たとえばレンヌなどの大きなところなどは、全国に先駆けて1年ほど前からすでに始めているのですが、こういうモーロンのような小さい自治体ではまだ始まったばかりです。その中でも、コンコレが比較的きちんと取り組めているのは、コンコレの町長がまだ若くて子どももたくさんいて、教育に関心があるためで、予算がなくても、とにかく何でもやってみよう、という感じで取り組んでいます。一方、モーロンには幼稚園と小学校を合わせて300人の子どもがいます。それを最大18人ずつのグループに分けてアニマシオンをするわけですが、その際、毎回8人のアニマトゥールが必要で、それを探すだけでも

大変なのです。

E：今日のアニマシオンで「オオカミの世界旅行」を朗読した男性がいましたが、あの方はどういう立場の方ですか？

L：庭の木を世話しているような庭師みたいな人かもしれないですけれどわかりません。いつもは別の女性がやってくれるのですが、今日は彼女の体調がわるかったため、急遽、市に所属している人を頼んで来てもらいました。それが彼だったので、私は彼がどういうことをしている人かあまりよくわからないです。ただ、誰かいてくれないと私の仕事はできなかったので助かりました。応急措置ですね。たぶん、「オオカミの世界旅行」も初めて読んだのではないかと思います。

E：まったくのカオス状態ですね。

L：中学になると「勉強」の要素が強くなって、授業に遊びの要素が全くなくなり、授業などの雰囲気も全く変わります。もう何年も前から、子ども達の中学に上がってからの学力やその他いろいろなことがいつも問題になっています。フランスの国民教育大臣はいろいろ変わっているのに、それはずっとうまくいっているようには思えません。

大統領が新しくオランドに変わった時にペイヨン(Peillon, V.) が国民教育大臣に就任し、今回のこのNAPを提案しました。この大臣はすでに辞任しているのですが、NAPが始まってまだ3週間くらいしか経っていないのに、もうみんな疲れてきています。子ども達も、学校でもないのに、授業が15時30分に終わってから、近くとは言ってもとにかく急いで決められた場所に移動して、そこで何かしなくてはならないわけです。わずか3週間ですが、だんだんと「なぜこれをしなくてはならないの？」という声が大きくなっています。どんどんリズムが速くなっているし、いろいろなことが詰め込まれ過ぎているという部分はちょっとあるような気がします。この取り組みがどこまで行くのかまだ全然見えていません。

E：なぜペイヨンは、それを変えようとしたのですか？

L：私もどうして変えたのかはよくわかりませんが、プロエルメル（モーロンはプロエルメルというカントン、いわゆる小郡に属するコミューン）では、これまで10数年の長い期間、試験的に午前中だけ普通の授業をして、午後は「デクヴェール（decouverte 、発見･探検）」といって、近くのモルビアン湾やデュック湖で小さなヨットやカヌーを体験する活動などをしてきました。この10数年、午前中に集中して勉強をして、午後はいろいろな活動に取り組んできたのです。このやり方は子ども達の集中力を養えるので結構うまくいってました。こういう取り組みと成果が今回の決定に影響を与えたのかもしれませんね。

今はプロエルメルも、午後をすべてアクティビティにするのではなくて、一時間だけのアニマシオンになって来ており、とても大きく変化しています。そのため、私も仕事量がものすごく増えていて、一番上のCN1とCN2のクラスの子ども達のプログラムを11～12月の休みのあとにやらなくてはならないのですが、内容もテーマもまだまったくできていません。

モーロンのもう一人の担当は、ハンディキャップを持った子たちにアニマシオンをしなくてはなりません。そのため、私が幼稚園から小学校のすべてを担当することになり、仕事はたいへんです。子ども達は皆それぞれレベルが違うのでアプローチを一律にはできません。しかも、それぞれが集中できるようなものにしなければなりません。私のアニマシオンはレクチャーなので、本を読んだり、お話を紹介したりということになりますが、スポーツなどと違って、学校が終わってから子ども達を再びレクチャーに集中させるとい

うのはなかなか大変です。だからマレトロワのマガリーは、今まで通りにメディアテックが学校と一緒にアニマシオンを行うやり方を変えないと言っているのです。

E：オオカミの話は私はすごく興味があります。日本もそうですがオオカミを獲ってしまってシカが増えてしまったという話があります。本当は学校が、このアニマシオンをうまく使って、生物学的なことにつなげていけるとすごくいいですよね。

L：文学の中でオオカミはとても大きな存在なので、ここでは生物学的にというよりは、文学の観点からテーマにとりあげています。ロビーの展示は実際のオオカミの写真ですけれど、あくまでもイメージであって、そこからオオカミがどんな生き物か等という展開は考えていません。なぜなら、図鑑を紹介しているわけではありませんので。

学校も今回は「世界旅行」というテーマがあるので､たまたまオ「オカミが世界を回る」という本があったからつながった、というぐらいの程度です。以前はもう少し密に、学校の先生もここに来てやってきて、テーマなどについても話し合ったり協力したりできていたけれども、NAPに変わり、完全に学校は関係しなくなるので、会う機会もなくなり学校と合わせて進めることにはなりません。

L：学校の方も、水曜日が休みで週4日だったのが、2013年から週4.5日となって水曜日の午前中も授業をすることになり、子ども達も週の5日間は毎朝早く起きて学校に通わなくてはならなくなったわけです。以前は水曜日にブレイクする時間があったわけですが、4日間に、8時半から16時半までの授業を詰め込むことは結構長くて集中力が続きません。そこで、午前中に授業をして、午後はいろいろなアクティビティをするプログラムをプロエルメルでは10数年以上前から取り入れていました。このプロエルメルのプログラムは、ある程度はうまくいっていたのですけれど、今回NAPに変わったため混乱しています。やはり10年以上やってみないとわからないところはあるのでしょう。

E：そのアクティビティの効果というものを認めているから、毎日の授業のあとに入れるということにしているとも考えられますよね。

L：ええ、それはそうなんですね。ただ、1時間というのがやっぱり短すぎます。まとまったことをしようと思っても、なかなかこの時間内ではできない。しかも、20数人をいっぺんに相手するのは難しいので、二つのグループにわけると、それぞれが 30分ずつになってしまいます。

L：これは日本の紙芝居です。日本人の友達がいる人に教えてもらって子ども達と作ったものです。こっちは買ったものですけれど。マレトロワのメディアテックにもスペースがありますよね。ここに子ども達が来て、以前は人形劇などもここでやっていました。この紙芝居の内容ですが…。この子達はバスケットの試合をするのですが、この子は太っていてできない、この子はかけていたメガネがこわれちゃってベンチに下がってしまう。この女の子はチョコレートをみんなに分けてあげる。今度は一番背が高い子が参加して、あなたはおっきいわよとか、この子は太ってるからそういうふうに言われてしまったりして、メガネの子にも、みんなちょっとした名前がついていて、みんなそれぞれ違う。でも、最後はやっぱりみんなで一緒にやるのがいちばんいいね、というような内容です。

これらの紙芝居はスタージュといってインターンシップの大人が作っています。美術のアソシエーションが絵を描いてくれたり、文章の文字も書いてくれたりします。来年くらいには、NAPの中で、CE1、CE2の子ども達にこういったものを作らせることをしたいのです。ただそのためには問題があります。

それは道具です。作るための道具がないの

です。メリーがオファーしてくれない限りは必要な道具をこちらから持って行くことはできないですし、学校にもよって環境が違うので、メリーが必要な道具などを提供してくれれば、こういうもの作りの作業も、1時間ずつだとしても少しずつでもできます。

このように可能性は色々と考えられるのですが、とにかく今は何も言えませんし、結果も見えません。これからどうすればうまくいくか、どうすれば時間を有効に使えるかということを、現場が考えていかなければならないのですけれども、始めたばかりなので今はまだわかりません。

E：本当に大変な時に、こんなふうに受け入れていただいて感謝しています。とても興味深いお話をありがとうございました。

2 Maison de la Chauve-souris

1 place de l'église 56540 KERNASCLEDEN

Kernascleden（ケルナスクレダン）はモルビアン県の西部、ロリアンの北方20kmに位置する、人口400名ほどの小さなコミューンである（図1）。町の中央には古い教会があり、隣接した建物ではコウモリ博物館（Maison de la Chauve-souris）が民間団体AMIKIROによって設立・運営されている。本研究では、地域の自然環境を活用したESD環境教育の推進拠点として、この博物館を2014年10月3日㈮に再訪し、午前中はCyndie Herve氏がコウモリ博物館で実施した高校生向けアニマシオンに、午後は同じくCyndie Herve氏が、ケルナスクレダンの西側に位置するコミューンLe Faouët（ル・ファウエ）のEcole primaire publique（小学校）で実施したアニマシオンに参加して観察を行なった。また、アニマシオンの後にCyndie Herve氏に対して簡単なインタビュー調査を行った。活動内容とインタビューの概要は下記のとおりである。

1）PontivyのLycée privé（私立高校）の生徒対象のアニマシオン

Maison de la Chauve-sourisでは学校向けのアニマシオンを提供しており、最初にアニマシオンの内容を学校と相談して実施し、その後、博物館で経験したことを学校に持ち帰り、学校がその内容を授業に取り込んで学びを深めている（遠藤、2020）。取り扱う内容に国の基準や指示があるわけではないが、学校では学年ごとの履修内容を国が定めているので、それに合わせてプログラムを組むことになり、この中には演劇も入るし、他にもいろいろなことが入るが、内容は先生にもよるし、学校の姿勢にもよる（遠藤、2020）。例えば、生物学的なことは、学年によって全然勉強の内容が違うので、博物館ではコウモリの生態に関するいくつかのテーマを与え、それを学校に持ち帰り、学校が実際の学習の中に取り入れていく、という形で学校教育と連携をしている。今回のアニマシオンでは、私立高校の普通科の14～15歳のクラスで、生物の授業の一環として生物教員1名と生徒20名ほどが参加した。二時間半ほどのアニマシオンの内容は下記の通りである。

8：50コウモリ館の前に集合
　コウモリの説明
　①：学名、特徴（顔、耳、鼻、目）について　15分
　②：手と翼の構造の比較　5分
　③：保全（ブルターニュ・ヴィヴォン、AMIKIRO）　5分
9：16コウモリ館近くのクレープリー前
　コウモリの生態①：隣の建物の1m程の隙間を通って採餌に出かける　5分
9：22教会（Eglise Notre-Dame de Kernascléden）前に移動、鐘塔を眺める（図9）
　コウモリの生態②：教会の屋根裏に生息するコウモリの出入り口　6分
　フクロウが狩りをするので入口を変えた
　コウモリの生態③：1年に1回繁殖する等の繁殖行動、コウモリの一年　12分
　コウモリの数（300頭）
　調査法：バットディテクターで数える

9：40教会の中へ移動
　ダンス・マカーブル（死の舞踏、図10）

図９：コウモリの棲む尖塔を眺める高校生

からコウモリのイメージを膨らませる 5分

9：45コウモリ館へ移動

9：49コウモリ館２階へ移動、最初の展示室へ（コウモリの標本が展示されている）

コウモリの生態④：いろいろなコウモリの標本、骨格標本を見て解説　11分

最小のコウモリ（体長4～5cm)、耳が最大のコウモリ

9：49隣の展示室へ移動（ビデオルーム、屋根裏にカメラが設置され映像が常時映されている）

コウモリの生態⑤：教会の屋根裏のリアルタイムの映像を観察　12分

子どもの映像を見ながら繁殖に関する説明

10：12隣の展示室へ移動：変調されたコウモリの声が流れている

コウモリの生態⑥：超音波によるエコロケーション、コミュニケーション　5分

種類で異なり、人間の耳では聞こえない

暗い夜に音で自由に見ることができる

フランスにコウモリは30種

ブルターニュには21種

生徒による活動①：袋の中からカードを1枚引き、カードに書かれた質問の答を各自が展示パネル等から探す。　12分

生徒による活動②：集合して、ひとり一人が質問を読んで答を発表　20分

例）最小のコウモリは？、声の周波数は？など

10：50 ３階を通って１階へ、コウモリ研究所へ移動。先生は生徒の答を回収してチェック

10：55コウモリ研究所（図11）

コウモリの保全①：コウモリの保全に関する映像　30分

質疑応答：自分たちにできること

・草刈りの時に少し草を残して虫を増やす

・花や木を植えて虫を増やす

・コウモリのいる場所に立ち入らない

・庭を探してみる

11：30アニマシオン終了

学校に戻って生徒たちが調べたことをワークショップで発表する予定

アニマシオンに参加した著者の感想としては、まず、アニマトゥールはメモなど見ずに、全て内容を覚えていて、話す様子は穏やかな口調だが真剣で、参加者はその様子に引き込まれている。そ

図10：14世紀の壁画ダンス・マカーブル（死の舞踏）

図11：コウモリ研究所で解説するCyndie Herve氏

の内容は、単に展示を解説するのでなく、生徒が受け身にならず自分で発見するような工夫がある。生徒は、説明の間、むやみにしゃべったりせず、マナーを守り小声で話し、他人が発言しているときは騒がず、大変静かにしている。また、挙手をしてわからないことを随時質問できる。引率の教員（生物専門）については、本人が専門的なことをたくさん質問していたため、生徒が発見するチャンスを奪っているように思えた。アニマシオンを担当したCyndie Herve氏も「先生が生物担当で専門的なことを次々と質問してきたので、意図していたよりも生物の専門性が強すぎる内容になってしまい、大変やりにくかった」と感想を残している。

2）Le Faouët（ル・ファウエ）の公立小学校の児童向けアニマシオン

ケルナスクレダンから10kmほど西方に位置するル・ファウエの公立小学校（図12）で、放課後の課外活動 NAP でのアニマシオンを見学した。このアニマシオンはAMIKIROと教育委員会が正式に契約して実施している環境教育プログラムのひとつで、午前に引き続きCyndie Herve氏が担当し、小学校の校庭でコウモリに関するアニマシオンを行なった。近くで見学することができなかったため、少し離れたところからアニマシオンの概要を記録した。

15：30に学校が終わると、集合場所になっている校庭の大きな木（図13）を目指して子どもたちが教室から走って出て来る。10分ほど遊びの時間をおいて15:40からアニマシオンが開始された。今回は14名のグループで行ったが、Le Faouët（ル・ファウエ）ではTAPへの参加は強制ではないため、迎えに来る保護者もいた。小学校での活動であるが、教員は参加せず、市のコーディネーターが調整し、活動はすべてアソシエーションに任せているようだった。マスコットとアニマトゥールと子どもたちが三位一体になって進められたアニマシオンの内容を簡単に記載しておく。

15：30小学校の校庭に出て来る。10分ほど遊んで集合場所の大きな木の下に集まる。

15：40アニマシオン開始

Cyndie Herve氏がコウモリについて問いかけながら、興味を引き出す。

Q：最大のコウモリは？

A：最大1.8m

15：50オオコウモリ（flying fox）の写真集を見せながら目が発達していることをみせる

Q：オオコウモリの食べ物は？

図12：ル・ファウエの公立小学校

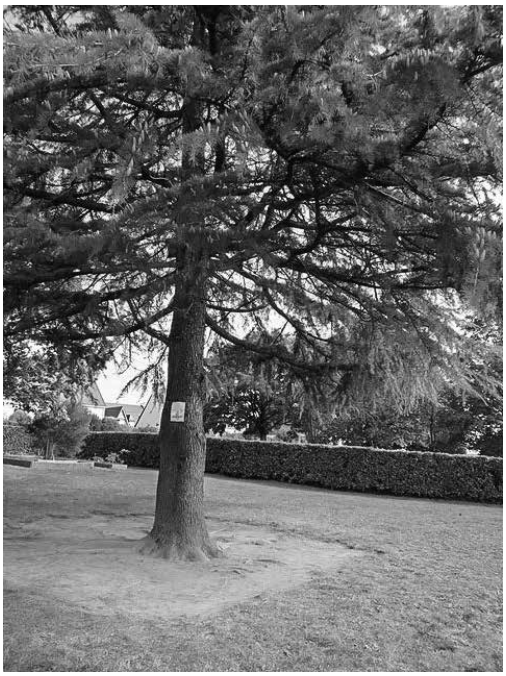

図13：校庭の大きなシダーの木

A：フルーツ

15：55地球儀で南米を差して、南米に生息するチスイコウモリの写真を見せながら

人間でなく牛の血を吸っていることなど生態を説明

他にも、いろいろなコウモリの写真を見せながら子ども達に問いかける

Q：小さいコウモリのサイズは？　　など

16：08ゲーム①：コウモリとガ

壁役の子どもたちが洞窟を模して半円のサークルを作って並び、その中で目隠しをした

コウモリ役の子がチチッと言いながらモス役の子を捕まえるゲーム。コウモリにチチッと言われたらモスは声を返さなければならない。壁に近づくと壁がブーという声を出して知らせる。コウモリのエコロケーション（音響定位）を模している。

16：17ゲーム②：カードゲーム

子どもたちは互いが向き合うように２列に並び、列の間の地面に裏返しに置かれている動物の絵が描かれたカードを取り合うゲーム。それぞれの列の子供たちには１番から順番に番号が割り振られていて、指導者が番号とカードを指示すると、呼ばれた番号の各列の子どもが走ってそのカードを探し回り、先に見つけた方が獲得する。カードの場所を記憶していくと早く探し出すことができるようになるので、日本でいう神経衰弱というカードゲームに伝えたい内容を盛り込んだものと言える。

16:30　アニマシオン終了

３）Cyndie Herve氏へのインタビュー

終日のアニマシオンのため長時間のインタビューはできず短時間のやりとりとなったが、NAPやアニマトゥールの置かれている現状を聞き取ることができた。内容は下記にまとめた。

Herve氏：以前は、水曜日は学校が休みで、アクティビティは水曜日と土曜日に乗馬、音楽など個人的に行なっていた。新しい課外授業NAPは9月に突然やらなくてはならなくなったものである。これまで学校と連携して実施していたプログラムとは大きく異なり、学校や先生が全く関与しなくなった点が大きく異なっている。16:30以降は放課後となり別の制度での活動があるため、このNAPは15:30 ～ 16:30に子供達の相手をする穴埋め的措置のように思える。アニマトゥールは契約をしているので実施しようとするが、親が反対して子供を参加させないこともある。

NAPの活動は、わずか１時間（子供たちの移動時間を含むので実質45分）と短かすぎ、子供たちは内容を覚えられないだろうから、教育的効果については疑問が残る。様々な問題があるが、何をどこに言えば改善されるのかがわからないし、国からやれと言われても困る。ただ、このような状況ではあるが、子供たちにとって何が最善かを考え、より良い方向を目指している。このアニマシオンには、若者の雇用創出という側面もある。

考察

フランスの学校教育におけるESDは、著者がこれまで報告した図書館や小学校、アソシエーションでは、学校とアニマシオンを担当する外部団体がコミュニケーションをとりながら、教育課程に位置づくように授業や課外活動の時間に取り組まれていた（遠藤、2017b、2020）。しかし、今回の報告では、教育改革によって、学校と外部の協力団体が連携して取り組んでいた課外活動から学校や教員がまったく関与しない課外活動NAPへと急激にシフトしていることが明らかになった。日本と同様にフランスでも、学力低下の問題とゆとりの間で度々教育改革が行われてきたため、学校と外部団体が連携したESDの取り組みにも大きな変化が起きている。

今回調査を行なった総合図書館（Médiathèque de Mauron）と民間団体AMIKIROのいずれの担当者も、2014年9月から始まった（法改正により取り組まなければならなくなった）NAPに対して、あまりにも急な制度変更に当惑している様子だった。その当惑からは、単に労力が増えるということへの不満ではなく、地域間格差、学校との

連携の断絶、教育の質の低下、他の業務（サービス）への悪影響など、一つの制度変更が様々なことに連鎖し、その複合体として問題を捉えていることが伝わってきた。しかし、決して当惑するに留まることなく、急激な制度変更に関わらず限られた条件のなかで、子どもたちにとって最適なプログラムを模索している様子がとても印象的であった。このような、制度への不満をやれない・やらない理由や判断に直結させる幼稚な行動にでるのでなく、いかなる状況でも常に最適解を求め、すぐに動き始める成熟した大人としての態度と行動は、フランス訪問で取材した教育ファーム、総合図書館、自然公園、小学校、自然保護団体の全ての方々に共通するものであった（遠藤、2017b、2019、2020）。この資質・能力や態度こそが、地球環境の持続的保全を実現するために、ESDを通して子ども達に身につけてほしい力であるとともに、新・学習指導要領が目指す汎用性のある学力であるとも言える。

著者が調査を実施した2013 ～ 2014年は、まさにフランスの教育制度の過渡期にあり、地方自治体で本格的に導入された2014年は現場がその対応に追われていた時期で、学校と外部人材の関わり方を現地調査し、重要な要素を抽出するには最適な時期でもあった。その後、7 ～ 8年が経過した現在、制度の不備への修正も加えられているようである。この制度改革の変遷を交えたESDに関する議論は別の機会に譲ることとする。

謝辞

長時間に渡るインタービューやプログラムの体験の機会を快く与えてくださった，Laetitia Salic氏, Cyndie Herve氏に心より感謝する．本研究は，JSPS科研費24501116を受けて実施した．

引用文献

遠藤晃（2017a）「総合的な学習の時間とESD：科学的思考で未来を切り開く」，持続可能な地域と社会のための学習社会文化論（降旗信一編）、学文社、75-88.

遠藤晃（2017b）「フランス・ブルターニュ地域圏におけるESD・環境教育(1)：教育ファーム・ブレナトゥールとセネ湿地自然保護センター」，南九州大学研報47A：125-133.

遠藤晃（2019）「新・学習指導要領具現化の方法１：フランス・ブルターニュ地方におけるESD実践に学ぶ」，南九州大学人間発達研究，Vol. 9, 63-81.

遠藤晃（2020）「フランス・ブルターニュ地域圏における ESD・環境教育（２）：行政と総合図書館，博物館による取り組み 」，南九州大学研報47A：125-133.

国立教育政策研究所（2019）：平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査報告書【質問紙調査】、1-237.